書評・紹介

ファウスト生誕 500年にちなむ学術シンポジウム「歴史上のファウスト」報告集ならびに新刊書について

芳　原　政　弘

1) *Der historische Faust.* Ein wissenschaftliches Symposium (26/27. September 1980) Hrsg. und mit einem Nachwort von Günther Mahal. Knittlingen 1982.
2) Günther Mahal, *Fausts Geburtstag. Eine Hypothese.* Knittlingen 1979. (Bibliophiler Privatdruck in 175 Ex.)
3) ders., *Faust. Die Spuren eines geheimnisvollen Lebens.* München und Bern 1980.
4) Frank Baron, *Doctor Faustus from History to Legend.* München 1978.
5) ders., *Faustus. Geschichte, Sage, Dichtung.* München 1982.
6) Marcus Conradt/Felix Huby, *Die Geschichte vom Doktor Faust.* München 1980.
7) Hansjörg Maus, *Faust. Eine deutsche Legende.* Wien und München 1980.

ゲーテ畢生の大作『ファウスト』のモデルとなって一躍世界的名声を得るにいたったこの人物は,疑いもなくルター(Martin Luther 1483—1546)と同時代に生存した歴史上の実在人物である．今日の定説によれば，彼は1480年頃現在西ドイツの Baden-Württenberg 州 Knittlingen に生まれ，1540年頃同州 Staufen に没したとされる．したがって，1980年は生誕500年にあたり，これを記念して生誕地でファウスト協会（1967年設立）主催による学術シンポジウム「歴史上のファウスト」が催され，世界の著名な研究家が一堂に会して講演・報告・討論をおこなった．またこの年を機縁に彼に関する新しい著作・研究書も出版された．上記 1) がその

シンポジウム報告集（非売品）であり，2）以下の6冊が私の入手した新刊書である．これ以外にご存知の方はお教え願いたい．以下，これらについて紹介・書評を試みたいが，紙面の都合上逐一詳細にふれる余裕がないので，「歴史上のファウスト」に関する今日の研究状況と問題点という観点から一括してみることにする．

周知のように，ファウストは生前の行状をめぐり様々な伝説が生まれたが，それが没後47年を経た1587年にはじめて Frankfurt am Main の書肆 Spies より作者匿名で刊本（*Historia von D. Johann Fausten*）にまとめられ，以後1599年の Widmann 本，1674年の Pfitzer 本，1725年の Christlich Meynender 本など，いわゆるファウスト民衆本を通じて一般に流布するとともに，他方最初の *Historia* の英訳に基づき，イギリスの劇作家マーロウ（Christopher Marlowe 1564—1593）が逸早く（1590年頃）戯曲化を試み，その台本を携えたイギリスの旅劇団が，17世紀はじめにドイツへ逆輸入の形で上演，以後民衆劇により，また人形芝居に改作されて広く人々に親しまれるようになった．このファウスト伝説はさらに近代の詩人・劇作家によって深い象徴的意味を見いだされ，18世紀のレッシング，クリンガー，ゲーテ，19世紀のグラッベ，レーナウ，ハイネ，20世紀のヴァレリー，トーマス・マンをはじめ，数知れぬ多くの文学上のテーマとなったのである．つまりファウストは歴史から伝説へ，伝説から文学へと，換言すれば「歴史上のファウスト」，「伝説上のファウスト」，「文学上のファスウト」という三つの局面をもって500年の長い伝統を生き続けてきたわけである．ところが，ファウスト伝説と文学の形成はそれぞれに独自なファウスト像を構築するにいたり，そのため「歴史上のファウスト」の方はいつの間にか歪曲と忘却の彼方に葬られ，その痕跡すら容易につかめぬようになっていた．が，ほかならぬゲーテの傑作がその素材提供主への強い関心と熱心な探索を促し，ついに19世紀後半になって彼の歴史上の実在を突き止めることに成功したのである．ことに Witkowski の

24の文献資料を年代順に考証・検討した，厳密な論究(Georg Witkowski, Der historische Faust. In: *Deutsche Zeitschrift der Geschichtswissenschaft*. N. F. Jg. 1, Leipzig 1896/97, S. 298—350) は従前の探索・研究の全成果を総括し，以後の研究に重要な礎石を置いた画期的業績といってよいだろう．

現在のところ，ファウストの歴史上の実在を立証する根本資料として，3つの公文書と 6つの私文書が発掘されている．(Witkowski はこのうち7つを挙げている) 残念ながら，ファウスト自筆の文書は，懸命な探索にもかかわらず，いまだに発掘されていない．しかしこの9個の記録は彼の存命中とみなされる時期に，予言者・占星家・魔術師として各地を遍歴したファウストに直接出会ったり間接的に知った同時代人が，偶々彼について書き留めてあったものであり，ここでその資料を掲げる紙面はないが，これらによって彼の史上の存在は確実に証明される．(因みにこれ以外の記録はすべて彼の没後のもの，したがって伝説の領域に属するとみなされ，「歴史上のファウスト」は「伝説上のファウスト」と厳密に区別されるべきだとする当該研究の立場からは，当然資料価値として，副次的なものとなる) ところが，数の上からもみてわずか9個にすぎず，しかも記述量があまりにも少なく，また肝心の記述内容に不明確で相矛盾するところもあり，さらに私文書 (書簡) においては必然的に書き手の主観が強くあらわれ，しかも複数の人間の証言となれば，彼についての評価も当然肯定・否定の両様にわかれ，いずれが彼の真相を伝えるものか容易に判断できぬ面もあるなど，これらの文書は彼の消息をとどめたこのうえもない貴重なものながら，質量ともに乏しく，これによって彼のわずかな行状・足跡をたどり得ても，60年にわたる彼の生涯の内実については，ほとんど知ることができないのである．Henning 博士の編纂する『ファウスト書誌』(Hans Henning, *Faust-Bibliographie*. 5 Bde. Berlin u. Weimar 1966—1976) 中の「歴史上のファウスト」項目には183の文献が列挙されてい

るが，この数をもってしても彼の真相を把握できないことはその困難さを端的に物語るといってよい．

さて，今回のシンポジウムおよび新刊文献は，生誕500年という記念すべき時点でもあり，従来の成果の一大総括，諸問題の解明，さらに新説の提示などが大いに期待されるところであった．結論的にいって，Mahalの前掲書 2）において一新説，つまりファウストの誕生年月日（1478年4月23日）の確定（仮説）がおこなわれたこと，3）において従来の定説に沿った最も詳細なファウスト研究，したがってこの分野の標準書が書かれたことが第一に特筆すべきことだろう．そして Baron の両著において従来の定説に対して異論を唱える見解（Karl Schottenloher, Ernst Beutler, Thomas Mann など）に一層の論究が加えられ，定説とは別人のファウストの提唱をみたことは注目すべき成果といってよい．つまりここに従来の定説である1480年頃 Knittlingen 生まれの Johann Georg Faust と異説の 1466/67年 Heidelberg 近在の Helmstadt 生まれの Georg Faustus（仮名）という二人のファウストが明確に対置されたわけである．しかし，ファウストはただ一人しか存在しないゆえ，両説のうち一方が誤りか，両方ともに何らかの欠陥があるということになる．この問題はもちろんシンポジウムでも大きく取りあげられ，またジャーナリズムの注目するところとなり，このテーマについて，定説の有力な支持者 Henning と Baron 自身の報告があり，討論が交わされた．まず，この問題からみていこう．

ファウストの生まれを1480年頃とする定説の論拠は「1507年8月20日付 Johannes Trithemius の Johann Virdung 宛書簡」に拠り，彼が1506年に Gelnhausen で出会った（しかし話し合わず，他人の手を介して名刺をもらった）というファウストは，その言及内容からみて25歳位だろうと推定し，これを逆算したものである．この説は 1845年に Emil Friedrich Julius Sommer により唱えられ，その後 1886年に Erich

Schmidt, さらに G. Witkowski, H Henning などの権威者に採用されて，一般化したと思われるが，根拠としてはたんなる推定にすぎないゆえ，きわめて薄弱といえる．しかし Mahal の仮説が正しければ，2年の誤差となる．

Knittlingen 誕生説は弟子 Johannes Manlius がまとめた師 Philipp Melanchthon (1497—1560) の対話集 (*Locorum communium colletanea.* Basel 1563) に拠り，その中で，„Ich habe einen gekennt/mit namen (Johannes) Faustus von Kundling (ist ein kleines stettlein/nicht weit von meinem Vatterland)..." とあり，この Kundling は Knittlingen の古称で，Melanchthon の故郷 Bretten にも近いこと，さらにこの地に1500年頃 Faust 姓が幾例かあり，特に1542年のある家屋売買契約書に „...des Jörgen Gerlachen seelig behausung, allwo Fausten born." とあること，また口承伝説によればファウストはこの家主 Jörg Gerlach と Faust 姓の内縁の女性の子というところから，この地生まれとされたのである．つまり定説の論拠は Melanchthon/Manlius のいう „Johann Faust von Knittlingen" を郷土資料で裏づけたものといってよい．

これに対して Baron は根本資料の中で，ファウストがどんな姓名・出身地で書かれているかを (Philipp Begardi, *Index sanitatis.* 1539 を除き) 次のように列挙して，

1. 1507年8月20日 — Johannes Trithemius: „Magister Sabellicus Faustus iunior"
2. 1513年10月3日—Conrad Mutianus Rufus: „Georgius Faustus Helmitheus Hedelbergensis"
3. 1520年2月12日—Hans Müller: „Doctor Faustus Philosoph(us)"
4. 1528年6月17日 — Ein Ingolstädter Schreiber: „Doctor Jörg Faustus von Haidlberg"

5. 1528年7月—Kilian Leib: „Georgius Faustus Helmstet (ensis)“
6. 1532年5月10日—Hieronymus Holzschuher: „Doctor Faust(us)“
7. 1536年8月13日—Joachim Camerarius: „Faustus“
8. 1540年1月15日—Phillip von Hutten: „Philosophus Faustus“

ここから次の結論を導く．ファウストの名前は Georg（ラテン語 Georgius）または Jörg であり，Johann (Johannes) ではない．姓はすべて，ドイツ語文書でも， Faustus であるから， Faust ではない．„Johann Faust von Kundling“ は，Melanchthon/Manlius 文書の独訳(1565年)が初出で，それ以後しばしば用いられたもので，これは同時代人の証言だといっても，実際はファウスト没後 25年も経て弟子がまとめたものだから，信憑性がうすい．それよりも上記 5.，4.，2. に注目すべきで，5. の Helmstet (Helmstadt) は Heidelberg から 20 km の近郊にあり，ファウストはこの小村に生まれたと考えられる．4. で Heidelberg とあるのは，この小村が，周知でないゆえ，近隣の大きな町名を用いたとみてよい．2. の Helmitheus Hedelbergensis は以上の二つを並記したものと解される．(従来の定説では， Helmitheus という元来存在しない語を，Hemitheus の誤記，それゆえこの箇所は Heidelberger Halbgott と訳されたが)，Helmitheus は手稿本では Helmstheus (Helmstetius の意）とも読みとれ，残念な誤記だが，これは Helmstadt bei Heidelberg の意味と考えられる．ところで Faustus も Faust も，当時の大学入学者名簿にこれに該当する者はいないが， Georg Helmstetter という人物が 1483年1月9日に Heidelberg 大学に入学登録している．彼は1483—1484年得業士課程，1484—1487年修士課程を終えており，当時は 20，21歳でこれを終了したので，逆算すると，彼の生まれは 1466年か 1467年となる．この人物がファウストと同一人物で，卒業後 Trithemius に会うまでに Faustus という仮名を用いたのであろう．1. に „Magister Georgius Sabellicus Faustus iunior“ とあるが，Sabellicus は周知の

ようにローマ北方の魔術ゆかりのSabinerland出身の魔術師 Macus Antonius Sabellicus (1506年没) を，Faustus senior というのは（実父ではなく）たぶん Publius Faustus Andrelinus (1518年没・パリ大学修辞学・天文学教授，ドイツ人弟子が多くいた）を指し，この並記の仕方は，Faustus が実名を意味せず，この二人に自分をなぞらえることによって魔術師としての卓越さとアカデミックな知識を誇示し，かつみずからを神秘化しようとしたのだろう．また根本資料に Magister, Doctor, Philosophus という，一見矛盾する称号が使われているが，これは彼が大学で哲学科に学び，その最高学位 Magister を取得したことを意味する．Magister の取得者は，学外ではよく神学・法学・医学の最高学位 Doktor を用いたので，彼も民衆の間でこれを名乗り，しかし Trithemius のような学識者に対しては正確に Magister として自己紹介したと考えられ，決して矛盾しない．この Heidelberg 大学の哲学科に学んだ 1466/1467 年生まれの „Georg Faustus von Helmstadt“ がファウストその人であり，のちに Georg の名が忘れられ „Johann Faust von Knittlingen“ とされたのである．要約すれば，以上が Baron のこの問題に関する主な見解である．

この異説に対し，Mahal は Knittlingen 誕生説の唯一の根拠である Melanchthon/Manlius 文書の信憑性について，Melanchthon がファウストと個人的面識があったのか，名声から知ったのか問題は残るにせよ，Manlius はこの地名を師から聞かなければ知るはずはないとして支持するとともに，Helmstadt 説について，当時 Knittlingen には Helmstadt 出身の騎士が居住し，彼らは裕福な貴族階級の出として知られ，住民の多くが彼らに隷属していた．記述内容からみて，ファウストは高貴の出として相手に印象づけるためこれを利用したとも考えられるなどと，周到な推測的考察により，この地生まれと断定できないと指摘し，また意味不明な „Georgius Faustus Helmitheus Hedelbergensis“ について，文脈か

らみて Georgius Faustus が氏名で，あとはその形容，つまり Halbgott von Heidelberg の意であり，Helmitheus を Helmstetens の誤記とする場合，Faust-Helmstetter という人物と解すれば文法上不可能であり，Faust aus Helmstadt (bei) Heidelberg と解すれば出身地を二つ並べる言い方は当時の慣習に矛盾すると反駁している．したがって，問題は Melanchthon/Manlius の記述の真偽に帰着するが，Baron はシンポジウム報告の中で，特にこれをとりあげ，その内容がきわめて逸話性の強いものであり，またいかにルターに由来する 1530 年代の悪魔論争（die Teufelpolemik）の影響下に立つかを指摘し，その信憑性に強い疑義を主張した．他方 Henning は同報告の末尾および討論において，Manlius の記録は最初の客観的記述と後の逸話的部分を区別すべきだとし，Georg Helmstetter 説について，この人物がファウストと結びつく決定的証拠力を欠いていると述べ，Mahal の「ファウストの誕生日」の仮説を，定説を根拠づける一例として評価した．なお，この仮説は，根本資料の「1528年 6 月 5 日の Kilian Leib の天候日記」にある „wenn Sonne und Jupiter im gleichen Grad ein und desselben Sternzeichens stehen, dann werden Propheten geboren (wohl solche wie seinesgleichen“)（原文ラテン語）をもとに，当時幼児の命名はその誕生・洗礼日が聖者カレンダーの祝日にあたる聖者名にしたがったという前提に立ち，ファウストの名の Georg にあたる聖 Georg の祝日は 4 月23日で，占星術では雄牛座にあたる．そして予言者（ファウストもその一人）が誕生するという同一星座中の太陽と木星の合一は雄牛座ではカソリックの聖者カレンダーの 1466，1478，1490年にあたり，したがって彼の誕生日は定説の1480年頃に近い 1478 年の 4 月 23 日であると考証したものである．（この説について 1500年頃すべての子供が聖者名によって命名されたわけではないとする反論もだされた）．

シンポジウムでは異説は大方の支持を得られなかったようであるが，し

かしこれを否定する十分な根拠もない．ファウストの氏名，誕生の問題は結局真偽を決定づける基準となる客観的証拠を欠くため，名字が Faust（実名）か Faustus（仮名）か，名は Georg のみか Johann Georg か，生誕地は Knittlingen か Helmstadt かも，単数の典拠ではどちらともいえず，1542年の家屋契約書についても原典は焼失し，Baron もこれに疑義を唱え，また Mahal の仮説も 1478年を 1466年にすれば，Georg Helmstetter 説と合致するが，しかし *„Zimmerische Chronik"* に記録されている，ファウストが「老齢で」(im großen alter) 没したという年齢は，当時の寿命では50歳をこえるか60歳位だと主張する Mahal では決して納得はしまい．要するに，この問題は有力な新資料の裏づけがないかぎり，推測的考察の水かけ論にとどまらざるを得ないだろう．

次に Mahal, Baron, Conradt/Huby, Maus の前掲書についてごく簡単に紹介したい．前二者が純粋に，学問的立場からの考察であるのに対し，後二者はともにジャーナリストなので，既存の材料・成果を学的に吟味するのでなく，これを認めたうえ，一般向きに叙述したもので，学問上特に問題とすべきものはない．ただ Conradt は Knittlingen 出身で，多年ファウストに関心を抱き，Huby とともにファウストのテレビ映画を製作したこともあるそうで，本著は定説に則って材料を客観的・即物的に解釈し，一般読者にわかりやすくファウストの生涯を叙述した，一読に値する好書である．Maus のは副題の示すように「ドイツの伝説」としてとらえたもので，根本資料と伝説を混交して扱い，史上のファウストの叙述としてはわかりにくいものとなっている．

さて，Mahal の著書はこのテーマに対する，本格的かつ総合的対決であり，考察のポイントを適切に章立て，まず筆者の意図を「扱いがたい遺産——歴史上のファウストへの接近」として示し，ファウストの歴史・伝説・文学の形成史を概観して，*Historia* 以来のファウスト伝および文学が作者自身まるでその生証人であるかのように明瞭かつ詳細な姿を描出して

いるのに対し，当の人物は没後 1540年から 1870年まで全くの伝説的存在であり，史上の実在を確認し得たあとも種々な仮説を経て今日の成果を得たが，乏しい資料ゆえに依然として困難な課題であり，しかし伝説ではない，現実の彼に迫りたいとする．次の「ヤヌスの面相をもつ時期——ファウストの時代(1480—1540)」では，この中世から近世への転換期にあたる複雑な時代における諸事件と思潮について詳述し，本題の 9 つの根本資料に関する考察では，各文書の記録者名およびその内容の要点を付した章立てをおこない，はじめに手稿原典(出典年月日・所蔵所を付記)とこれを活字化したもの(ラテン語原典は独訳のみ)を掲げて考察に入る，わかりやすい体裁をとっている．さらに没後の記録についても「真の足跡か虚偽の遍歴か？——歴史上のファウストの信頼し得る文献」として，Melanchthon/Manlius 文書その他ファウスト没後の成立になる諸文献について考察し，最後に全体を総括して，特に問題とされる点，ファウストの氏名，誕生，称号，教育，占星，予言，錬金，魔術，死，伝説の形成などについて個別に章立て，これに全体の約半分弱をあて考察している．テキストの考証・解釈・吟味は，記録者の経歴・思想はもとより，当時の社会的・地理的・学問的状況や人的交流，資料相互の関連性などを多面的に考慮しつつ，実に周到かつ繊細におこなっている．391 頁のこの大著は，歴史上のファウストをめぐるあらゆる角度からの総合的考察であり，これまでに類をみない，当該研究史上の最大の成果といってよい．ただ問題点に関する考察には，推測的あるいは推理的要素が多分にあり，果して正しいかどうかは後世の判断に待つほかないだろう．

Mahal が定説を支持し，かつこれを一層強化する形で，ファウストを包括的に論じたのに対し，Baron は異説こそ正当とする明確な立場で論述し，異説ゆえ孤軍奮闘したが，筆鋒は鋭く，論理も明解で，説得力に富んでいる．彼の研究は ファウスト（彼は持論から Faustus と表記）を Georg Helmstetter という具体的人物でとらえたところに新しい観点を

示すとともに，資料の扱いがとても厳しく，ファウストの生前・没後の記録を峻別し，後者に信憑性を認めず，さらに資料がファウスト自身のものでなく，すべて他人の手になる以上，それは記述者の目に映ったファウストであるとする見方に立って，記述内容を記述者側の吟味によってその反照から理解するという明確な方法をとったところに顕著な特徴がある．たとえば，Trithemius のファウスト批判について，Trithemius の魔術がルネサンス期の学者の白魔術（die natürliche Magie）ゆえに，その批判内容からファウストの魔術は中世的伝統に近いものだろうという解釈を示している．しかし彼みずから「ファウストの占星術の方法や見方について多くを語り得ない」と述べているように，この博識を駆使した記述者の反照によるあぶりだし的ファウスト理解も，あぶりだされたものの内容が不明確なので，もう一歩中へ踏みこめず，結論として得られたものは全体としてそれほど目新しいものはないといえる．これは資料自体の乏しさに基づくもので，むしろこの分野の解明の至難さを示すといってよい．が，彼の原典重視の考察から，たとえば原典中のラテン語 Faustus を無造作に Faust と独訳し，-us は当時の人文主義者の慣習にしたがったラテン語化とする定説に対し，資料のどこにも Faust の表記はない，同様に Johann の名もないという指摘がなされ，また定説の有力な典拠たる，誕生地にふれた Melanchthon/Manlius 文書や，死および死去地（1540年頃 Staufen im Breisgau）にふれた *Zimmerische Chronik*（1565年頃）について周到に吟味し，その内容には常識をこえた逸話的要素が多いので信憑性がないとする疑義がだされ，これらが従来の定説の有力な典拠だけに，彼の鋭い指摘によってこれまでの曖昧な原典理解やことに生前・没後の資料の区別を明確にせず，後者に依拠しすぎる見解の盲点がつかれ，定説の基盤をゆるがすにいたったことは，彼の研究姿勢の堅実さを如実に物語っている．そして特にファウストが，Trithemius, Agrippa, Paracelsus などのルネサンス期の魔術師と同様に，今日近代自然科学の前段階として

評価され，当時としては必ずしも悪いものとみなされぬ（たとえばファウストは Bamberg の司教の依頼で星占いを立てている）魔術・星占・錬金術に従事した人物であるのに，のちに悪魔との結託者という汚名を着せられたのは，ルター（1533—1535年：1566年刊の二つのテーブルスピーチでファウストを悪魔にみたてた）やルターの考えを受けついだ Melanchthon に由来し，その影響が *Historia* おける「悪名高い魔術師」というファウスト伝説につながったとする，つまりルターの評価以後ファウストは悪名を一身に受けるという新しい方向をとったという指摘は，注目すべき見解といえよう．なお，Baron は前掲書5）で歴史・伝説のみでなく，文学（Marlowe, Goethe, Thomas Mann）についても論述している．

最後にシンポジウム報告について，報告者と題目を列挙し，簡単なコメントをつける．

1. Peter Thaddäus Lang (Tübingen): Das Deutsche Reich im Zeitalter des Doktor Faust
2. Wolf-Dieter Müller-Jahncke (Kirchen/Sieg): Astrologie und Magie zur Zeit des historischen Faust
3. Hans Henning (Weimar): Nach 500 Jahren—unsere Kenntnisse vom historischen Faust
4. Frank Baron (Lawrence/Kansas): Der Doctor Faustus des 16. Jahrhunderts. Probleme und Aufgabe seiner Biographie
5. Hans Schwerte (Aachen): „Adlers Flügel". Zu Historia 1587 (Kap. 2 und 5)
6. Kurt Adel (Wien): Von Historie zum Exempel
7. György Walkó (Budapest): Doktor Faustus—Dilettantismus oder Wissenschaftlichkeit?
8. André Dabezies (Aix-en-Provence): Zur Entstehung der Faust-Sage und -Legende

9. Hans Henning: - 〔Festvortrag am 28. September 1980〕 Faust im 16. Jahrhundert. Gewinn und Verlust bei der Herausbildung des Faust-Stoffes vor dem Hintergrund der frühbürgerlichen Revolution

第一部報告：Lang は一般に新時代への転期とされるこの時代も，ドイツ国内では皇帝を頂点とする厳格な身分制の社会秩序に顕著な変動はみられず，支配機構・経済・学問・宗教・一般生活など旧態依然だったと全般的にかなり具体的に述べた．Müller-Jahncke は当時の占星・魔術について，その状況と代表的人物，ことに「16世紀の古典的魔術師」と称される Agrippa von Nettesheim について，ファウストも同様な生涯を送ったのではないかという想定のもとに述べ，両者の接触の可能性も示唆した．第二部報告：Henning は定説の提唱者の一人として，今日知り得るかぎりの，ファウストの歩みと彼の時代について述べ，Baron は特に定説の典拠である，Melanchthon/Manlius の文書の疑義性を具体的に指摘した．第三部報告：Schwerte は *Historia* の重要なモチーフ「ワシの翼」の受用について，特にマーロウのイカルス像に注目し，彼を通じて18世紀の重要な象徴へと受けつがれた点を指摘した．第四部報告：Adel は歴史上のファウストがキリスト教の読者への警告書となるにいたったプロセスを，1484年の教皇 Innozenz 8世の教書，1517年の宗教改革，1525年の農民戦争の外的状況からとさらに彼の生前から *Historia* にいたる記録についてを五つ層に分けて考察した．Walkó はファウストの名誉回復の可能性と必然性という問いを立て，今日の資料からみて彼の教養は中途はんぱなものであり，書物も残していないので，Agrippa や Paracelsus とは比較にならないが，彼の秘術は学問性より通俗化，彼の存在の特徴は通俗性とアウトサイダーにあるとして評価し，逆説的だがこのディレッタンティズムがかえって後世の文学でとりあげられる必然性をもったと述べた．付録：Dabezies は病欠で，紙面参加し，没後より *Historia* までの8つ

の記録・逸話について，様式面に注目して分析し，悪魔との契約は，1580年頃，彼をめぐる逸話・笑話は 1540 — 50 年頃，悪魔との関連は 1548 年（Gast による）かそれ以前と推定し，そして，Gast に由来する彼の「おそるべ死」の言及がいろんな言伝え・逸話・想像を結合・吸収し，ファウスト伝説を形成する接合点になったと指摘した．ファウスト研究の第一人者 Henning は「16 世紀のファウスト」と題し，歴史上のファウストと *Historia* がファウスト主題の世界文学への題材を提供したはじまりと出発点であるとし，彼と彼の伝説について時代との関わりにおいて総括して論じ，記念講演にふさわしい示唆に富む数々の指摘をおこなった．

「歴史上のファウスト」研究は19世紀後半の文献発掘以来今日まで間断なく続けられたが，資料不足の壁に阻まれ，依然として多くの問題を残している．ファウストの周辺部については余すところなく論究されたが，肝心の実体については推量と仮定に終わらざるを得ないというのが，今日の研究状況といってよいだろう．Mahal の書物につけられた紙カバーには，Dr. Günther Mahal はファウストの信頼するに足る足跡を「探偵的な感の鋭さで」追究したと紹介されている．Baron もファウストの解明は「目下のところ，歴史家あるいは文学史家よりもむしろ詩人にゆだねた方が適切ではなかろうか」と述べている．現段階では，既存の資料による実証的考察は限界に達し，探偵的推理と詩人的想像に頼らざるを得ないというわけである．Mahal, Baron ともまだ壮年の碩学であり，今後の成果が期待されるが，しかし何よりももう一つの新文献の発掘を待望するのがこの分野に関心をもつ者の誰もが抱いている偽らざる気持だろう．